

# “QUOTATION”

Worldwide Creative Journal

QUOTATION.JP  
QUOTATIONMAGAZINE.JP

## SPECIAL INTERVIEW

MACHINE-A / Masashi Kawamura / NORM /  
Yuichiro Tanaka / Shohei Otomo / imaone

n°20  
RENEWED ISSUE  
¥1200+tax



## PHOTO ISSUE

### PHOTOGRAPHERS IN ACTION

いま、躍動するフォトグラファーたち

Jamie Hawkesworth / Synchronodogs /  
TOILETPAPER MAGAZINE / Ina Jang / Sayo Nagase

### PHOTO BOOKS NOW

写真集をとりまく現状

Atsushi Hamanaka & Tomoki Matsumoto / Alec Soth /  
Yusuke Nakajima / Ivan Vartanian / minä perhonen

リニューアル  
新装刊!

## INTERVIEW WITH Ivan Vartanian

interviewed: Toru Hachige

写真をテーマに企画、プロデュース、編集、出版、アートディレクション、展覧会企画などさまざまな活動をしているアイヴァン・ヴァルタニアン。彼の活動と現在の写真状況について話を聞いた。

アイヴァンさんの仕事について  
教えてください。

保行人だったり、プロデューサーだったり、クリエイティブディレクター、アートディレクター、イベントオーガナイザーなどプロジェクトによっていろいろです。共通するのはフォトグラフィアと一緒に仕事をすることです。

写真化は、変わるもので、変化するものだと思います。写真展、スライドショー、パフォーマンス、プリント、イベントみたいに、いろいろなところで形を変えていく。そういう写真のイメージをどのようなモノにするかがとても重要です。

写真は常に流動的で定義しない、それがコンセプト的に強くも弱くも思うと思います。グラフィックのような形になってしまうと、そこから抜けられないでも強くて面白い写真は柔軟性を保ちながらいろいろなメディアに対応できます。いまはみんなモノに対しての意識がとて強くなってきていて、写真集であっても、普通に印刷製本されただけで物足りないし、フォトグラフィアの世界感を十分に伝えることができない。部数が少なくていいから、特定の人をターゲットにしたほうが面白い写真集が作れる時代だと思います。

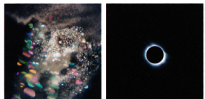
イベントをする理由としては「フォトグラフィアム」という言葉にたどり着くと思っています。写真集ではバラバラと見て終わってしまうものが、体系的なことをやることによって、その一環で終わる時間がより長くなる。写真と関わる時間とその関係の深みに身体的にあるように写真の力がさらに大きくなっていく。特に現在「写真を見る」ことに特別なない世代にとっては、多少レトロでありながらコンセプトualなことです。

具体的にどのようなイベントをやっていますか？

2014年9月に西野社平さんと一緒にアムステルダムでインスタレーションをやりました。彼が撮影した4x5メートルの大きなアムステルダムのジョウラマ写真を展示して、参加者はそのなかから10枚の好みの写真をピックアップしてもらい、ボックスセットにして持って帰ってもらうというものです。これは今年の4月にはニューヨーク、8月にはロンドン、東京では9月にやる予定です。あと4月末にはニューヨークで日本の写真やフォトグラフィアを紹介するフェスティバル「SHASHIN: PHOTOGRAPHY FROM JAPAN」も開催します。アカデミックなシンポジウムが中心ですが、その開催前後には



DAIDO MORIYAMA: ACCIDENT  
(Installation view at Yusa Yusa Gallery Photography / Film)



8880 KAMAKURA: APPROACHING WHITENESS

ニューヨークにある写真を扱う一流ギャラリーで日本人写真家の個展や、ニューヨークで参加して頂くさまざまな施設でスライドショーやパフォーマンス、映像などいくつかのイベントを企画しています。

「SHASHIN: PHOTOGRAPHY FROM JAPAN」で、日本人のフォトグラフィア、日本の写真を海外で紹介しようと思った理由を教えてください。

海外では日本の写真に対する知識や情報が少なすぎて、その状況を変えたかったからです。日本の写真文化を海外で説明すると、日本の写真家がかわれるし、プリントと写真集も売れる。キュレーターや研究者たちが感じる好奇心を湧かせたいんです。僕が17年間日本でがんばってきた位置付けも強くなる。西洋とは違った日本ならではの写真を、西洋の人にもわかりやすいように文脈、情報、書籍、雑誌、シンポジウム、レクチャーなどを提供して、日本人も面白いと思うべきだし、そうすると、日本の写真世界だけでなく、全世界が豊かになっていく。そのなかでいろいろな可能性がある。ファッション、コマール、広告、プロダクト、作品、展覧会、アカデミックな研究といろいろな可能性もあります。まだやりたいことがたくさんあります。でもようやく、少しずつできてきました。振り返ってみると僕としてはまだ好きなことをやっているだけなんですけど。

写真においては日本人と、海外で違いはありますか？

文化の違いがあります。言葉の理解ではなくて、コミュニケーションスタイルが全然違います。色のセンス、宗教観、民族のアイデンティティとかが違いは写真も変わってきます。あと日本では写真を所帯する、プリントを扱うという習慣がない。あくまでも写真は消耗品。でも、見たらおもしろいという面だからこそ、面白い写真が生まれてくる。日本は80年代から90年にかけて大量の印刷物があって、面白い写真文化がサブカルチャーとして生まれてきました。そういう背景も海外とは違っています。

最近の写真状況はどうなんでしょうか？

いまは、アートっぽい写真です。写真はアートでもあるし、アートでもないアートの写真が結構あるのですが、でもアートとして成立している写真は非常に少ない。アートかアートじゃないか、それがはっきりしていないほうが面白い時代です。わかるな

いが面白い。どうやって価値観をつけるかまだ定まっていない。どういう位置付けにすればいいか。どのように評価したらいいのか。それがまだ決まっていないからこそ、可能性が大きいと思います。

今後のどのようになると思っていますか？

自分の証が中心のカラーな写真の時代が終わって、次は黒名の時代。写真家の個人の個性がわからなくても作品が鑑賞できる。ある意味自己を消す時代になると思います。写真だけが売られていくのではなくて、新しい、日本人らしさなくても作品を美しめる時代。日本人自身が美しめるのが好きです。例えば、自分を出すのではなく、作品の存在の中心がコンセプトだったり、曖昧でフォーカスがぼんやりしている作品や、男か女かわからない、はっきりしている決定的な瞬間やポートレートはあまり人気がないですね。これって？といったものに謎が残らないと、志望者は子さんの目線カラー味濃みみたいな想像を働かせる作品が面白い。みんなデジタルの色に染まってきた。カラー写真がいったん消え去ると思います。カラー情報がないでも、モノクロが増えていくと思います。デジタル時代から卒業して、技術的なところを捨て、ポストデジタルの時代に向かってきています。だから、これ以上カラー情報があっても変わらないか

ラー写真を撮影すると、道別の空間とぶつかってしまっそれがしぼりになってしまっ。だったらそのカラー情報を排除して、モノクロのほうが楽なんです。写真らしい写真が撮れる。あと、いまはモノクロで撮りたい人も増えてきているようです。

アイワンさんが手掛けてきた

写真集もいくつか紹介してもらえませんか？

【[UNTITLED] 横田大輔】

これは1年半前くらいに出展した横田大輔くんの作品展 [UNTITLED]。僕もいつも加工して作品を作り上げ、写真がどんどん変わっていくというのがメインなので、出版物にするときには、写真は同じだけ1冊1冊が違うようにしました。真鍮にシルクスクリーンで刷って、そこに彫像をかける化学的反応によって変わってきます。イメージは一冊だけ1枚ずつ作品が異なる。他の作品の作り方をコピーがばばくしています。

【[CITIES] 西野野矢】

箱のなかに、ポスターと10枚のプリントと小冊子が入っています。ひとつが10cmx10cmの大きさのプリントが1000枚のグリッドに分割され、そのなかから参加者に10枚の好みの写真をピックアップしてもらいます。2014年にアムステルダムでやっ

たときのもので、次回は4月にニューヨークでやります。その後ロンドン、東京で開催します。それぞれの都市によって画は同じですけど中身が変わってきます。

【[PHREECONSTRUCTCTT]】

ホンマタカシさんが、自分の写真をお客さんの前で削んで、削片をお客さんに渡して、それをお客さんが自分で写真を再構成した写真50枚を選んで収録されています。ワークショップは2012年ですが、これは2014年10月に発行しました。

今後のアイワンさんの予定、「ゴリガ」の展開を教えてくださいませんか？

毎月1冊ZINEを出していく予定です。写真家の世界観を伝えるために、それぞれが違うZINEになります。バラバラの束を束ねてまとめてチューブに入れるとか、セックスやプリントとか製本や印刷方法が違うとか、1年続けたいな程度、そして3ヶ月おきに匠匠のフォトグラファーに協力してもらって、定期購読者しか手に入れないスペシャルなZINEを作ります。紙メディアの特性をいかしたZINEというコンセプトで、紙ベースですがいまはスピード感が重要なので、紙ベースのタンブラーって思ってもらえばいいですね。他にもさまざまなプロジェクトが進行しています。



TAKASHI HOMMA: PHREECONSTRUCTCTT



SOHEI NISHINO: CITIES



DAIKICHI YOKOTA: UNTITLED



Ivan Vartanian / アイワン・ヴァルタニアン

1979年ニューヨーク生まれ。東京でアートとデザインの世界に入社。書籍の発行、企画、ライター、編集、デザイン、インスタレーションや展覧会などの企画・プロデュースの多岐に渡る活動を開展している。2009年に年報誌カラーグラフィックスを創刊。

www.golga.com